

1/2(土) まいど! 倫理が、朝晩のキリ涼しくなりまは今日この頃 皆さん
如何 お過ごしですか! 私には読書の喜びなんて世界が違ひありません

せいせい 精読 程度です。道徳的な筆があげば実行
木下子かな? 幸せ海がマホー鳥 2023. 10. 7~10. 13

今週の

倫理

10月のテーマ | 読書の喜び

1354号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

学校の寮を出て二十歳から二十一歳にかけてある教育者のお宅に下宿させていた。新潮社版の『世界文学全集』が三十数冊そろえてあった。卒業までにその全部を読んでしまおうと私は決心した。

そこでときにはねじりハチ巻をしたりして、帰宅してから読むように心がけた。ヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』など、すじがきはだいたい知っていたが、大部のものをこまかに読んでみると、純文学的にもなかなかおもしろいところがありユーゴーとはえらい作家だな、とつくづく見直したようないであった。

とにかく世界文学の代表作を片っぱしから、ときにはページをななめに読むこともあった。しかし、苦しいなかにも読破してゆくことがおもしろくて、けっきょく二ヶ月ごろまでにはひととおり目をとおしてしまつたのである。

そのうちに自宅の書架は、だんだんいっぱいになりついにはみ出すばかりとなつた。一杯になつてしまつた。そして約二十年の歳月が流れた。この書架のどこには、どういふ本があるかというところは、そこに行かなくても、ちゃんと頭に入つていた。停電



読書

丸山竹秋

したまつ暗な晩でも、また目をつむつても、手さぐりで望む本を探すことは、かんとんに出来たほどであった。

ところがである。そのように本好きの私が、四十三、四歳のころから、パツタリと本が読めなくなつてしまつた。いつのまにか、本をひらいてもそのつぎを讀みつづけるエネルギーをなくしている自分に気がつき、ハテ? と首をかしげるようになったのである。

それは、本を讀むということによって真理を思い、美を感ずるということよりも、じつさいの人生生活や大自然の狀態から直接にそれらを得ようとする氣持ちが強くなつてきたためである。

多くの本を讀みあさるのもよいが、今はそれよりも一冊の本をふかく理解することだ。理解することとは、ほんとうは実践することなのだ。実践とは、それを身をもつて味わい、身をもつて行なうことである。

道徳的な内容であれば、みずから実行するということだ。美的な内容であれば、その美しさにみずから酔い心を遊ばせることだ。宗教的な内容にたいしては、みずからを信の立場におくことである。これらをひろく実践といたい。

そうしたみずからの実践をおして書を読むことが、自分には正しい讀みかたであると思えるようになった。本そのものは、あくまでもインデックスにすぎないと思うのである。（「よるこんで生きる」より）